

# 指導と結びつきうる「からかい」

——「いじり」の相互行為分析——

團康晃

## 1 はじめに

学校に集う人々は日々様々なかたちで笑いを含む活動を織り成している。例えば、休み時間に数人の男子生徒が集まってギャグをやって笑わせあったり(二〇〇九年一月一九日フィールドノート)、女子生徒が昼休みに集まって笑い話をしたりしていた(二〇〇九年一月二〇日)。そして私たちは、笑いを含む活動を見たり、その活動に参加したりする時、その活動を「冗談を言っている」、「ふざけている」や「からかっている」などと特徴づけて理解することができる。

一方で、このような生徒の休み時間や授業になされる笑いを伴う活動の中には、教師に不適切な活動として理解されるものもある。そして、そのような不適切だと判断された活動

は生徒指導(以下、「指導」とする)の対象となることがあった。本論はそのような活動の中でも、教師にとって「見」から「かき」に見え、指導すべきかどうかの判断が難しいと言われていた活動に注目する。ある教師はこの活動を、近年聞かれるようになった「いじり」という語で指示していた。

その具体的な事例を一つみてみよう。筆者は、二〇〇九年一月二〇日の参与観察の中で次のような特徴的な笑いをめぐる活動を観察している。それは男子生徒のAが、いつも遊んでいる特定の男子たちが何かジョークやダジャレを言った後に「シーン」という静寂を表現する身振りをその特定の男子たちから促され、Aがその身振りをした後に、その男子たちが笑うという一連の活動だった。一見、ジョークやダジャレなどの「笑ってよいこと」として組織された行為があるにもかかわらず、特定の男子たちはその後すぐに笑うのではなく、

Aの「シーン」という身振りを待ち、その身振りを確認し、笑っていた。A本人は、何かにつけて「シーン」という身振りを仲間たちからせがまれることに對し、「自分がスベっているようで嫌だ」ということを後の休み時間に述べていたが、「シーン」の要求がやむことはなく、しばらくの期間、Aはいわば「シーン」をする係を行っていた。

このやり取りが特定の成員間で流行し数日が経った頃、ある教師は授業中にAに向けられたこの成員による発話に對し指導を行っている。また、指導が行われた日の放課後、それを見ていた女子生徒は、彼等の活動は、自分たちでも止められるものであり、指導する必要はなかったと話していた(二〇〇九年一月二十七日フィールドノート)。

この活動をしばらく見守った後に、教師は指導を行い、一方である生徒は指導する必要はなかったと言う。この活動は、指導による活動への介入の判断が教師と生徒では時に分かれる「からかい」であった。さらに、この活動は指導すべきタイミングが難しいといった趣旨の話も教師から聞くことができた。故に、本論ではこの活動を指導と「結びつきうる」と表記している。

重要なことは、そのような指導すべきかどうかの判断が難しい活動が、繰り返し、まさにその結びつきうることによる特徴をもった活動として生じていることを教師も調査者も、生徒もわかっているという点である。つまり、「指導」と実

際の結びつかどうかはその具体的な事例によって異なっても、「指導と結びつきうる」という特徴は皆理解できているのだ。故に、指導実践において、このような「からかい」はしばしば重要な問題となっていた。本論は、そのような笑いを含む「からかい」でありながらも、指導と結びつきうる、「いじり」と呼ばれるような活動の一つに着目し、相互行為として分析することで、その活動が如何なる相互行為的な構造のもとに指導と結びつきうるのかを明らかにしたい。

以下では、まず「笑い」に関する様々な活動について、主にエスノメソドロジー・会話分析における先行研究の整理を行い(2節)、本論の分析の対象となるデータを集めた調査先とデータの特性について紹介する(3節)。そして「からかい」活動を行為の連鎖の構造から特徴づけを行い(4節)、続くデータの分析では、「からかい」活動のきっかけとなる行為の特性を行為の連鎖の側面と笑って良いことの組織の側面から(5節)、続いて「からかい」活動の「笑い」の後の展開から(6節)、分析を行っていく。加えて、ここで見てきた活動における「笑って良いこと」と成員性についての特徴を明らかにする(7節)。以上の分析から、「からかい」が成員性を共有するかたちでふざけているようにも、一方で指導すべきものとしてもみられる活動であるという理解可能性は如何にしてもたらされているのかという点について、その相互行為的な基盤を明らかにしていく。これは、生徒にとっ

## 2 先行研究

1節で見た「からかい」は、笑いが生じるにもかかわらず、指導と結びつけられる活動であった。本論がこれから見えていく「からかい」を分析していく上で、幾つか重要な先行研究を整理する。特に、本論は「からかい」を相互行為として分析していくことを目的とするため、エスノメソドロジー、会話分析を中心として整理を行う。笑いに関する会話分析は、その笑いが生じる際の相互行為の組織的な特徴に関するJefferson (1979 ほか)の研究やジョーク語りについてのSacksの研究(1974)など、蓄積されてきた。

そして、とりわけ本論にとって重要な先行研究としてDrew (1987)の「からかい」についての研究がある。本論がこれまで「からかい」と表記してきた活動は、フィールドにおいて特定の明確な名前を与えられているわけではないが、相互行為として幾つかの特徴を持ったものである。そして、重要なのはその相互行為としての構造を明確にすることだ。そ

Drew (1987: 226) 断片 (8) の引用 (行数を追加し、音の強弱に関しては省略)

- 00 Del : What are you doing at ho-me.  
01 (1.7)  
02 Paul : Sitting down watching the tu:be,  
03 Del : [khnhh::ih-huh .hhh  
04 Del : Watching n-hghn .h you-nghn (0.4) watching dayti-me stories uh?  
05 ( )  
06 Paul : No I was just watching this: uh:m(0.7).h.khh you know one of them game shows,  
(すべてのトランスクリプトの記号については本文末参照)

の為に、本論で対象とする活動を「からかい」と表記し、鍵括弧のないからからはDrewが指摘したからかい連鎖を想定するものとし、その異同に注目する。Drewの示したからかいの典型例は、「からかい」という活動を理解する上で重要な示唆をもたらすものだといえる。Drewは、からかいの連鎖的な環境の特徴を、次のようにまとめている。Drew (1987)の断片(8)の事例を参照しつつ見てみると、まずからかいと記述できる行為は典型的に、からかいの対象

となる隣接した先行する行為(02行目)に対する応答(03-

04行目)として組織される。故に「からかい」は「会話において自由に生じるものではない」(Drew 1987: 224)。

さらに、「からかいの対象になる先行する行為(02行目)の特徴として、度を越した文句や賞賛、間違いなど、「からかわれうる」特性があることが多く、故に「からかいの多くは、からかいの対象になる先行する行為についてある種の疑義を示すための方法として、その先行する順番を資源にし、組織されることが、その典型として示されている(03-04行目)。

そして、先行する行為への疑義として「からかい」が組織されるからこそ、からかわれた者は真面目な(Po-faced)応答(06行目)で、自らの評価や報告の正当性を守ると言う立場を選択可能になっていることを指摘していた。

本論で見ていく「からかい」は、一見すると「からかい」と記述可能な活動だと考えられる。実際、幾つかの事例はDrewが観察した事例に類似している。しかし、「からかい」の行為連鎖の構造とは幾つかの点で異なっていた。その中でも特に際立った差異として、「からかい」活動のきっかけとなる行為があった。からかいの連鎖の第一成分がからかわれる可能性がある度を越した報告や評価であるのに対し、「からかい」は先の事例にもあったように、報告や評価がなくとも開始されていた。これは5節で詳しく見ていくことになる。

次に、「Drewのからかい」と「からかい」との差異を見てい

### 3 データ

本論で扱うデータは、全て公立中学校での調査で行ったインタビューに基づいている。調査期間は二〇〇九年一月から三月にかけての三か月、さらに二〇一〇年の九月から一〇月にかけての二か月、さらに二〇一一年の四月に一月間行った。全観察日数は七八日である。学校規模は、全校生徒約三〇〇名、職員数約二〇名である。

調査手法としては生徒と共に登校から授業、休み時間、放課後の部活動から下校まで共に過ごしながらの参与観察を行い、適宜フィールドノーツを作成した。また昼休みや放課後を利用して生徒を対象にグループインタビュー(四名から八名のグループで実施)を行った。グループは、インタビュー対象者が普段遊んでいるメンバー、四名から八名で構成した。インタビューは生徒たちのメディア利用や遊びについて自由に話す形式のもので、データの利用については、匿名化のもと使用する旨を参加者に説明し、承諾を受けた上で行っている。また、各生徒との個人的な連絡は行わないという取り決めのもとに調査を行っており、分析後の最終的なデータの使用については当該中学校の調査時の学校長及び教員に相談した上で採用を決定している。

本論で扱う会話データは全て、このグループインタビュー

く上で示唆的な先行研究として、Glenn (2003) の笑いと権力についての分析がある。Glenn は Jefferson によって指摘されていた「くを笑いつく(Laughing at)」と「くと共に笑いつく(Laughing with)」の区別に注意を払いつながり、会話において誰かが笑いの標的になる会話を対象に分析を行い、如何なる行為の流れの中で会話参加者が笑われる者になるのか、笑う者になるのかといった相互行為の組織のされ方を分析している。そこで Glenn はこのような笑いと参加者の会話における立場を分析する際に注意すべき点として、「笑って良くなる(Laughable)」、「第一の笑う(First laugh)」、「第二の笑う(second laugh)」そして「笑うに続く活動(subsequent activities)」を挙げている。特に、「続く活動」は「からかい」に対する真面目な訂正や拒否といった、笑って良いことに対する続く活動の可能な展開を選んでいく上で重要なものであり、6節で詳しく見ていくことになる。

本論はこのような区別を殊更モデルとしてあてはめるようなことはしない(Glenn 自身そのようなものとして示しているわけではない)が、相互行為の特徴をより明確に記述する為の注目すべき点として、適宜注目しながら分析を進めていく。

である。グループインタビューの方式として、事前に回答してもらっている簡易式のアンケートをもとに調査者が質問をしていく半構造化されたインタビューの方式をとっている。インタビューが行われる状況は、休み時間の調査者の控室から放課後の廊下まで様々であったが、本論で用いた断片は全て休み時間の調査者控室でのものを用いている。

また、インタビューという活動をデータとして扱う際に注意すべき点として、インタビューという活動に期待されることとして、調査の目的となる質問の多くは調査者において行われたということが挙げられる。つまり、この活動の規範として、インタビューの大きな流れを作る質問と回答はそれぞれ調査者/被調査者によってなされることが期待されるものだといえる。

### 4 指導と結びつきうる「からかい」の形式的特徴

以下では具体的な指導と結びつきうる「からかい」の分析を行っていく。1節で紹介した調査者が観察した彼らのやり取りを手掛かりに、「からかい」活動が如何なる行為の連鎖によって組織されているのか、その特徴づけを行っていきたい。

1節で紹介した参与観察で記録した活動を行為の連鎖として記述する場合、①特定の男子の笑っても良い行為(ジョー

ク、②Aの「シーン」の身振り、③特定の男子による笑いという三つの行為の連鎖として記述することができる。ここではまず注目したいのは、①の笑って良いこととして組織された行為があるにもかかわらず、②では笑いがおきないという点である。通常、ジョークを含んだ発話を行う場合、笑いはその笑って良いことが理解できた時点で笑って良い場合が多い。その具体的な事例として次の会話を見てみたい。断片1は、男子生徒四名を対象としたインタビュー場面で、授業中に友人と自由に相談ができることの利点は何かということについて話しているところだ。

断片1

11 筆者：あ…… 逆にわからんかったときは？((わからなかったときは))

12 A：や わからんことないっちゃけど((わからないことないんだけど))

13 B：hhhhuhh(uhu)

14 C： [huhuhuhu]

15 B：おれほぼわからんっちゃけど((おれほとんどわからないんだけど))

16 A：ehhuhuhu

断片1の引用部の直前で調査者は授業についての質問をしている。その後、調査者は授業でわからないことがあったら友人に尋ねるかどうかが質問した(11行目)。この質問に対して、Aは「わからない

ことがない」とある種のジョークとして、つまり「笑って良いこと」として回答を組織している(12行目)。この回答の後、笑いが生じている(13-14行目)。さらに、15行目にはAのジョークを受けて、Bが同様な形式を持つジョークを含んだ回答を産出し、さらに笑いが生じている(16行目)。つまり、笑って良い発話の後すぐに笑いが来ている。このように、笑って良いジョークとして発話を産出する際、笑いはその発話の後、あるいはその発話が笑って良いことだということとが理解でき次第生じることが多い(Jefferson 1974)。また、逆に笑って良い箇所で笑いが生じないということ、笑って良い発話が失敗したことを示すことになる。さらに、このような笑って良いことを適切に笑えることは、Sacks (1974)が指摘するよう、その会話に参加する者たちの理解のチェックとして用いられることもある。

一方で、先に参与観察データをもとに示したような「からかい」の行為の連鎖の構造はこのような笑いも笑いも良い発話との関係からは逸脱的に見える。参与観察以外でも「からかい」活動だといえる行為の連鎖的特徴を持った活動は、生徒を対象としたインタビューにおいても幾度か生じていた。

断片2も男子生徒を対象としたインタビューである。Aは、まずBに対して質問があることを示し(01行目)、Bが聞いていることを示した後に(02行目)、Bに対して「シスコン」シ

スターコンプレックス」であるかどうか質問している(03行目)。「シスコン」という語自体がネガティブなニュアンスを持つものであり、それが悪口あるいは「からかい」であることは当事者たちにも我々にも理解可能であろう。つまり、ここで笑って良い発話がなされている。そして、その質問の形式をとった「からかい」に対し、大きな間があり、それは08行目のAの隣接ヘア第一成分(Sacks et al. 1974:2010)である質問が宛てられたBの沈黙であることがわかる(04行目)。そしてこのBによる回答の不在の後にCは笑いだすのである(05行目)。

断片2

01 A：ねえ(.)あれやろ？((あれだろ))

02 B：ん？

03 A：シスコンやろ？((シスコンだろ))

04 (1.0)

05 C：hhuhuhuhuhu[huhu シhスコhhン

06 B： [いや、

ここでわかるように05行目にCは笑っており、先に笑っても良い発話があったことを理解している。しかし、理解次第でできる限り早く笑うのではなく、Bの沈黙を十分に聞いた上で笑っているのだ。つまり、笑って良い発話の後に来るべきBの行為のスロットを理解した上で笑っているように見える。これは、ジョークを理解し笑うような事例

とは、行為の連鎖の構造及び笑いの組織のされ方が異なっていることを示唆している。

この二つの事例を見た時にわかる行為の連鎖的特徴は、笑って良い発話の後の笑いの組織のされ方であり、特に「からかい」は笑って良い発話の後に一つ来たるべき行為のスロットが用意されているという点である。

これは2節でまとめた「からかい連鎖」とも異なるものであり、Drewが述べていた「からかい」の「自由に生じることはない」という特徴と大きく異なる点だといえる。

以下では、この特徴的な「からかい」を構成する行為の連鎖を明らかにするために、インタビューの中で観察された「からかい」のきつかけとなる行為が如何に組織されているのかを見ていく。それは一見「からかい」のようにも見えるが、教師にとっては生徒指導の対象にすべきものとしても観察可能な「からかい」の特徴の一端を不すものとなる。

### 5 「からかい」活動のきつかけとなる行為のデザイン

4節で見た形式的特徴をより明確にいくために、「からかい」のきつかけとなる行為のデザインについて見ていきたい。一三回のインタビューデータにおいて4節で見たような「からかい」活動の構造は八つ観察された。この「からか

い」活動のきつかけとなる行為が、隣接ペア第一成分である事例は五つ、ある回答者への寄生的な発話を行っている事例が二つ、そして曖昧な事例が一つあった。ここでは「からかい」活動のきつかけとなる行為が如何にデザインされ、からかい連鎖とは異なり笑われることが他者によってある者に帰属されていくのか、その構造を明らかにする。

#### 5・1 隣接ペア第一成分による開始

まず、隣接ペア第一成分による「からかい」の開始について見てみたい。あらためて断片2を見てみよう。きつかけとなる行為は質問であり、それが隣接ペア第一成分となっていることがわかる。

まず、01行目において、AはBに呼びかけを行い、次の発話の宛先を明確にしている。Bの応答(02行目)の後、Aは「シスコンやる?」という質問をBに宛てた(03行目)。4節でも見たように、「シスコン」とは「シスターコンピュータ」というある種の逸脱的なカテゴリーであり、それがインフォマーシャルに用いられる際に見られる略称である。このカテゴリーを用いることで、この発話は何らかの笑って良いこととして組織されている。しかし、ここでこの発話が質問という隣接ペア第一成分として組織されている点に注意しなければならぬ。つまり、「シスコンやる?」という発話は、Bに対して宛てられた質問であり、ここで「シスコン」であるかど

うかの確認が求められているのはAではなくBである。Bはその確認を受け入れ次第「シスコン」となりうるような立場に連鎖の組織上おかれている。ここで重要なことは「からかい」活動のきつかけとなる行為の特徴として、隣接ペア第一成分であることに加えて、その発話に埋め込まれている「笑って良い」ことの帰属先が隣接ペア第二成分の産出を期待される者になっているという点だ。この事例において、Aの行った確認の要求としての質問は、B「を笑う」こと、Bに「笑って良いこと」を帰属する事を可能にするような発話として組織されているのである。

#### 5・2 回答者への寄生的な発話による開始

また、ある参加者の回答に寄生的な発話という行為が「からかい」活動のきつかけになる事例も観察された。断片3を見てみる。この会話断片は、男子5名とのインタビューである。この会話の前後については断片4で詳しく検討するが、まずここでは携帯ゲーム機であるPSPの所有と使用についての質問と回答が為されている。幾人かが回答した後に、Aが回答者として回答を行い(01行目)、筆者は回答を受けて、次の質問としてPSPで何をしているか問うている(02行目)。その質問に対し、Aは「インターネット」と回答し(03行目)、この回答の後、筆者は質問者としてその回答を受取るのではなく、沈黙を産出している。

注目したいのは、ここで生じた沈黙を利用して、BがAの03行目の回答に寄生的なデザインで、「で、エロいことしよる」という発話(05行目)を行っている点だ。この発話は寄生的であるが故に、Aの回答

の共同産出として聞くこ

とができる。さらに「で、エロいことしよる」という「笑って良いこと」は寄生的な共同産出という形式で組織されることで、その帰属先をAとすることができるとだ。

以上、二つのタイプの「からかい」のきつかけとなる行為の事例から見えてくる特徴は、次のように整理できる。「からかい」活動のきつかけは、まず「笑って良いこと」を埋め込むかたちで組織される。次に、「からかい」活動のきつかけとなる行為は、隣接ペア第一成分

で選択された誰かに「笑って良いこと」を帰属する(5・1)。または、誰かの発話に寄生的に「笑って良いこと」を埋め込んだ発話を組織することで、先行する発話者に「笑って良いこと」を帰属する(5・2)。

これはDrewのからかい連鎖で生じる行為連鎖の環境とは大きく異なるものである。「からかい」活動のきつかけとなる行為は、からかい連鎖のようならからかいの対象となる先行する行為なしに、特定の会話参加者「を」笑って良いこととすることができると連鎖的な環境を生み出す。つまり、「からかい」のきつかけとなる行為はからかい連鎖のように先行する「からかいうる」行為に対して組織されるのではなく、インタビュアーに参加する特定の参加者「を」笑って良いものとするとして組織される。そして、「を」笑って良い「こと」の対象として選択される者は、自分の先行する行為とは関係なくきつかけとなる行為の産出者によって選択されるのである。

1節で示したフィールドノートにおいてAが「自分がスベっているようで嫌だ」と発話しているように、「からかい」活動のきつかけとなる行為はAの意図とは関係なく、A「を」笑って良い「もの」としていた。Aの発話そのものがこの構造の理解のもとになされていったといえよう。

#### 断片3

- 01 A: PSP あるよ  
02 筆者: なんしよる? ((何してる?))  
03 A: え、PSP インターネット  
04 (1.0)  
05 B: で、エロいことしよる[ ] ((で、エロいことしてる))  
06 A: [エロいことしよ[ったり] ((エロいことしてたり))  
07 B: [hhuhuhuhuhu

## 6 「からかい」の「笑い」に後続する活動

しかしながら、このような「からかい」のきつかけとなる行為が産出されることで「からかい」が開始され「笑い」が生じても、その「笑い」に後続する活動は様々な展開される可能性を持っている。Drewが指摘し、Glennが更なる分析を積み重ねているように、からかいの後の笑いが生じても必ずしも真面目な拒否や訂正が来るとは限らず、「共に笑う」べきものとして活動を展開することもできる。本節で見えていきたいのは、そのような「からかい」活動がきつかけとなる行為によつて始まった後に見られる特徴的な展開の事例である。そこで注目したいのは、「からかい」活動において笑って良いことを帰属された者が「からかい」を引き受けエスカレートしていく事例と、「からかい」に抵抗する事例である。

### 6.1 「からかい」のエスカレート

次の断片4は、前節の断片3の前後の会話も含めて提示したものである。ここでの会話には前節で検討した「からかい」活動のきつかけとなる行為が観察できる。しかし、ここでの「からかい」のきつかけとなる行為の後、笑いの対象となったAは、真面目に拒否するのではなく、引き受けている。

- 断片4
- 03 筆者：PSP って(1.0)[もつとる?((持ってる?))  
 ((中略:12行目まで3人の参加者が持っていると回答している))
- 13 筆者：[三人もつとるったい(三人持ってるんだ)]
- 14 C：A
- 15 A：ん?
- 16 C：お前は?
- 17 A：なんが?((なにが?))
- 18 C：PSP
- 19 A：PSP あるよ
- 20 筆者：なんしよる?((何してる?))
- 21 A：え、PSP インターネット
- 22 (1.0)
- 23 B：で、エロいことしよる[ ] ((で、エロいことして))
- 24 A： [エロいことしよ[ ]たり] ((エロいことしてたり))
- 25 B： [hhuhuhuhuhu]
- 26 C：エ h ロ [い hh ことしよったり hhuhuhuhu ((エ h ロ い hh ことしてたり))
- 27 A： [(エロいことしよったり)、エロ小説読んだり、
- 28 A：エロ画像集めたり(K) らじぼんだり
- 29 B： [hhaha]
- 30 B：h[hahahaha]
- 31 D：[hhahaha]ha

の回答(24行目)に埋め込まれた「笑って良いこと」を笑っ

ているのだ。そして、27行目には「エロ小説読んだり」、28行

まず、03行目で筆者は彼らにPSPというゲーム機を持っているか質問している。それに対し、三名の男子がすぐに回答をした(04-12行目に該当するが分析と関わりないので省略している)。注目したいのはその後である。14行目で先に回答したCがまだ回答していないAの名を呼び、Aの回答を要求している。これは、まだAが回答していない為にAに向けてインタビュ어의回答者としての参加を促すような行為として聞くことができる。この後は前節で検討した点と重複するため、先に分析を行った23行目まで分析は割愛する。23行目でBは「で、エロいことしよる」という発言をAの21行目での回答に寄生させることで「インターネットでエロいことをする」という回答にその軌道を変更している。これは真面目な回答として聞くことができるAの回答(21行目)を、笑って良いこととして聞くことができる回答へとその軌道を変更し、「からかい」のきつかけとなる行為となっている。ここには続く展開に注目したい。続く行為の選択肢として、このBの寄生的な回答の共同産出によつて改変された自らの回答に対して、真面目に訂正することもできる。だが、AはBの回答の変更によるからかいを引き受け、Bの発言内容を繰り返し、さらに「エロいことしよったり」と「たり」という事例の列挙としてデザインしなおしている。ここで、「からかい」のきつかけとなる行為を産出したBや聞いていたCは笑っている(25・26行目)。つまり、AのPSPの使用について

目には「エロ画像集めたり」と、「笑って良いこと」として「エロいこと」の具体例を自ら追加し、エスカレートを行っている。ここでも、回答として示される「笑って良いこと」の帰属先は回答者のAとなり、「からかい」の対象であることを引き受けるといふ形式になっている。また、Aの巧みな点は、最終的に「らじぼんだり」という当時流行していた芸人のギャグを言う事で、「笑って良いこと」をA自身ではなく、そのギャグに最終的に移行している点だ。30・31行目を見てわかるように、BもCも最終的に、そのギャグを理解し笑っていることがわかる。しかしながら、その前までは「笑って良いこと」の帰属先がAとなっているという点は、「からかい」活動の特徴を維持していた。

## 断片5-2

- 10 (3.5)  
 11 E: (なんかお前)  
 12 A: Fさんに手紙やってぼろぼろに捨てられてもよかやつか  
 ((Fさんに手紙渡してぼろぼろに捨てられてもいいじゃん))  
 13 C: それないかい? ((それはないよ))  
 14 E: hhuhuhu  
 15 A: 捨てられえ hh 返されてもよかやつか破[られても  
 ((捨てられえ 返されてもいいじゃん。破られても。))  
 16 C: [返されたっけ  
 17 A: 靴の中に入れられとったっちゃんない?  
 ((靴の中に入れられてたんじゃないの?))  
 18 C: いや、違う  
 19 E: hhahahahahahaha まじかよこ[え::  
 20 C: [いや、違う  
 21 A: いや違う、あれ、あれ、Gたちが、

黙に対して有利な規範的な位置にある。なぜなら、Cの沈黙は、行為連鎖の規範からは産出すべき隣接ペアの第二成分を産出していないという身分にあり、その点ではCの沈黙こそが隣接ペアの規範を破っていることになるからである。

Cの沈黙と参加者の笑いの後に、Aは二度目の「からかい」のきっかけとなる行為を産出し(12行目)、この発話に対してCは真面目に訂正を行っている(13行目)。このCの訂正の

## 断片5-1

- 01 A: B,Bさんと付き合ってもよかやつか  
 ((B,Bさんと付き合ってもいいじゃないか))  
 02 (2.5)-Cの沈黙  
 03 A: hhu  
 04 筆者: (咳払い)  
 05 D: ((わざと咳払い二回))  
 06 E: hhuhuhuhuhu  
 07 D: ((さらに咳払いを続けている))  
 08 A: hhuhuhuhu  
 09 E: hhuhu

AはCに対して、同じクラスの子である「Bさん」と付き合うよう助言している。この助言は、Cに宛てられた隣接ペア第一成分であり、かつCの恋愛についての情報を暴

6・2 「からかい」への抵抗と「からかい」の再開  
 前項では、「からかい」によって生じた「笑い」の後、「からかい」に対する抵抗ではなく、「を笑うこと」の対象であることを引き受け、「笑って良いこと」を埋め込んだ回答をエスカレートさせていく事例を見てきた。一方、「からかい」のきっかけとなる行為に対して、抵抗する事例も観察できた。まず、断片5-1を見てみよう。ここで注目したいのは、「からかい」に対する真面目な訂正、「からかい」への抵抗と、抵抗に対する「からかい」の再挑戦の関係である。01行目で

露することとして組織されており、これまで見てきた「からかい」のきっかけとなっている。そして、このAがCに宛てた助言に対して、Cはその助言を受け取ることなく沈黙している(02行目)。この沈黙の後、Aは短く笑い(03行目)、さらに沈黙を守るCに対し、Dはわざとらしく咳払いをしている(05行目)。これはCの沈黙であることを強くマークするような行為だといえよう。そして、この咳払いの後に、EとAは笑い始めている(06・08・09行目)。これは4節で見たような、典型的な「からかい」活動だといえよう。注目したいのは、この後の行為の展開である。

引き続き断片5-2を見ていく。10行目は、「からかい」のきっかけとなる行為を無視するという点において、ある種の抵抗として記述可能だろう。この沈黙を続けるCに対して、Aは次に「Fさん」という先ほどとは異なる女子の名前を挙げ、手紙を渡してポロポロにされてもいいじゃないかという励ましの言葉をかけている。この発話は先の01行目の助言と同じような「よかやつか」というフレーズを用いた、01行目と異なる行為のアプローチとして聞くことができる。実際、この発話は、Cの過去の恋愛の失敗談を暴露するかたちで励ましを行っており、「からかい」のきっかけとなる行為の産出のやり直しになっている。つまり、「からかい」に対する沈黙の抵抗への「からかい」の再挑戦となっているのだ。

また、この「からかい」の再挑戦は、Cの抵抗としての沈

後にEの笑いが生じる(14行目)。この笑いはCの訂正による「からかい」への抵抗を引き受けていないこと、つまり、まだ「笑って良いこと」があることを理解することを示すものとなっている。さらに、このEの笑いに続いて、Aは三度目の「からかい」のきっかけとなる行為の産出を行っている(15行目)。

14-15行目からもわかるように、Cの抵抗に対する、「からかい」の再挑戦は隣接ペア第一成分を資源とする形で繰り返し可能になっている。このような「からかい」のきっかけとなる行為によってもたらされる「笑い」以降の連鎖の環境は、「からかい」の再挑戦を、隣接ペアの第一成分のやり直し、あるいは隣接ペア第二成分の産出の促しとして、可能にしているのだ。以上の分析からわかるように、「からかい」活動は、からかい連鎖のような真面目な対応やある種の抵抗によって閉じることはなく、むしろ再挑戦しやすい行為の連鎖の構造を持っていた。それは、「からかい」活動の持続可能性と抵抗の難しさ、あるいは「からかい」の再挑戦のしやすさの相互的基盤となっており、「を笑う」ことの対象となることの避けがたさをもたらすものである。それはある種の人間関係のトラブルを含む生徒指導すべき活動としての「からかい」という理解を可能とするものだといえる。

## 7 「笑って良いこと」と成員性

前節までは、行為の連鎖に注目してその特徴を見てきたが、それに加えて「からかい」のきつかけとなる行為に埋め込まれた「笑って良いこと」とそこでの参加者の成員性(串田二〇〇六)との関係性について幾つか確認をしておきたい。

ここまで見てきたデータはインタビューという形式をとっており、「調査者」(筆者)以外の参加者は共に「回答者」というカテゴリーの期待のもとに活動が組織されている。しかし、ここで注意したいのは、「回答者」として参加している者が、「からかい」のきつかけとなる行為を産出する時、インタビューという参加の枠組みをずらしているという点だ。断片5でAは回答ではなく唐突にCに助言をすることによって、「からかい」を始めている。また、断片4で、23行目のBは寄生的な共同の回答者として、Aの真面目な回答を「笑って良いこと」へとその軌道を変えていく。「からかい」活動はインタビューという活動に埋め込まれるかたちで展開される。

そして、このようなインタビューに埋め込まれる形で開始される「からかい」活動のきつかけとなる行為は、その多くが「からかい」活動に参加する者の間で共有された知識を資源とし、その知識と結びついた共通の成員性の達成のもとに

組織されている。例えば断片2の「シンスコンヤら」という「笑

って良いこと」を含む隣接ペア第一成分は唐突になされたものであり、Bに姉妹がいないとその「笑って良いこと」を理解することは難しくなる。断片5は、Cの好きな人をめぐる過去の経験の知識が「笑って良いこと」として用いられている。実際、Aの行為は形式的にはCの過去の恋愛に関する経験への理解に基づいて、恋愛への助言や励ましを組織することを通して、「からかい」のきつかけとなる行為を産出している。つまり、この恋愛経験のエピソードを共有する者として、同じ成員性を持つ者として行為を組み立てているのだ。

また、回答に寄生するきつかけとなる行為が組織される場合も同様に共通の成員性のもとになされている。断片4に見られるよう、ここで寄生的に産出される発話自体が、寄生先の前の発話についての理解、「笑って良いこと」と接続可能であるという理解のもとにその発話は産出されているのだ。

さらにここで重要なことは、「からかい」のきつかけとなる行為自体が共通の知識のもとに組織されているにもかかわらず、その行為に埋め込まれた「笑って良いこと」が誰かに帰属される時、参加者間には非対称性が生じるという点である。つまり、「からかい」のきつかけとなる行為によって、「笑って良いこと」が誰かに帰属される時、多くの場合、一方では共通の知識の下に共通の成員性が達成され、その行為が可能となっているが、帰属先となる参加者とそれ以外の参加者

では「笑われる者／笑う者」という非対称な関係が達成されている。ここでは、共通の成員性と成員間での非対称な関係が同時に生じているのである。いわばある種の仲間でありながら、その中に別の関係「笑う者／笑われる者」が生じている。これが繰り返される時、私たちは、その者たちの関係性がただの仲間とは異なるものに見えるだろう。これもまたこの「からかい」が指導と結びつきうる構造の一つだといえる。

## 8 結語

本論では、学校でのフィールドワークの中で繰り返し観察された、笑いが生じながらも時に教師の指導の対象となるような活動の構造を、エスノメソドロジー・会話分析の蓄積を踏まえ、具体的なデータの分析を通して明らかにしてきた。

本論で取り扱った特徴的な活動の相互行為的な構造は、笑いの要素を含んだ隣接ペア第一成分をその場に居合わせる者に宛てたり(5・1)、回答者として参加している者の発話に寄生的な発話を産出することで(5・2)、その直後に、笑いが起こるのではなく、次の発話を期待される者の発話の産出あるいは産出の困難の提示の後に笑いが生じるというものだった。このような発話の組み立ての特徴は、Drewが示したからかい連鎖が、真面目な応答によって閉じたり、Glennが示すように「共に笑う」展開を持つこととは異なり、「からかい

い」連鎖の拡張として継続されやすい構造を持っていた(6)。また、このような活動は、インタビュー活動においては同じカテゴリーにある参加者を笑われる対象とするものであり、時にその成員性を揺るがすような活動にもなっていたといえる(7)。

このような「からかい」活動の全てが教師によってトラップであると同定され指導されるのかどうかは本論の目的と対象の範疇を超えたものであり、論をあらためる必要がある。しかし、ここで示してきた「からかい」活動の構造を明らかにすることで、「からかい」がトラップとして理解され「うる」一つの基盤を示したということができよう。

また、本論が示した「からかい」の構造は、近年の小説や若者論(木堂二〇〇六、土井二〇〇九)において「いじり」と呼ばれてい

た若者のやり

取りを相互行

為として、具

体的なデータ

を分析する際

の一助となる

かもしれない。「いじり」という概念と

- =: 発話が繋がっている
- ?: 語尾が上がっている
- hhh: 笑い声
- : 発話の途切れ
- [ : 発話の開始が同時
- (文字): 聞き取りにくい発話
- (数字): 沈黙の長さ。
- (( )): 分析者による注記

トランスクリプトの記号



本論で見てきた相互行為の構造については、今後の課題としたい。

- 注①インタビューデータや本文中に用いられる固有名は、ブライバシーに配慮してアルファベット表記とし、あくまで断片内での発話者の区別を目的とする為、断片毎にアルファベットのAから順に割り当てた。また、方言に関しては二重括弧内に標準語訳を記してある。
- ②次年度「友達が嫌な気持ちになる冗談がある」という主旨の掲示を貼るクラスもあった。
- ③その点において、本論はインタビューを明言される内容を「一タ」として抽出するところをもではなく、相互行為として与えられる立場にある(鶴田・小宮二〇〇七)。
- ④その中の六事例が男子のグループで見られたものであり、二事例が女子のグループで見られるものだった。
- ⑤好きな人を暴露すると言う形で「からから」のまじかけとなる行為を組織している事例は三つあった。
- ⑥ここでの分析とは別だ、「からから」活動において「笑って良いこと」の帰属先となりやすい者「つまり、まじかけとなる行為を向けられやすい者がいる可能性がある」。この傾向性については本論の分析の目標を越えた課題であり、会話データのみになくエスノグラフィックなデータを合わせて検討する必要がある。際立った事例として、例えば断片4「直接的な「からから」活動の前で、省略部も含める」と10・14・16・18行目におけるAは繰り返し回答者となることが促している。その後の「からから」活動への展開を見れば、

からからというテクニックとAに関して何らかの「笑って良いこと」があることを他の回答者が知っていた可能性はあるかもしれない。このようにより大きな活動の幅の中の「からから」活動については今後の課題である。

#### 参考文献

- 土井隆義 二〇〇九 『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波ブックスレット。
- Drew, P. (1987). "Po-Faced Receipt of Teases". *Linguistics*, 25(1), 219-253.
- Jefferson, G. (1979). "A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance Declination". In G. Pathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp. 79-96). New York: Irvington.
- Glenn, P. (2003). *Laughter in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 木宮権 二〇〇六 『こぼれちり100倍笑ふこと』角川書店。
- 串田秀也 二〇〇六 『相互行為秩序と会話分析——「話し手」と「共-成真性」をめぐる参加の組織化』世界思想社。
- Pomerantz, A. M. (1984). "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes". In J. M. Atkinson and J. C. Heritage (Eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp. 57-101). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1974). "An Analysis of the Course of a Joke's

- Telling in Conversation". In R. Bauman and J. Sherzer (Eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking* (pp. 337-353). Cambridge, UK, New York, NY: Cambridge University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., and Jefferson, G. (1974). "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation". *Language*, 50(4), 696-735. (=110110) 西阪仰訳「会話のための順番交替の組織——最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社。
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., and Sacks, H. (1977). "The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation". *Language*, 53(2), 361-382. (=110110) 西阪仰訳「会話における修復の組織——自己訂正の優先性」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社。
- 鶴田幸恵・小宮友根 二〇〇七 「人ひとの人生を記述する——『相互行為としてのインタビュー』について」『ンシオロジ』五二(一)：二二—三六。
- (だん やすあき・東京大学大学院学際情報学府博士課程)